

に沿ってそびえ立ち、単なる平野とは趣の違った様相を呈しています。平野の片隅に設けられた灌漑池の「仁箇堤」から角田山を望む眺めは、季節ごとの移ろいを見せてくれます。

また、西蒲原郡巻町では柿の栽培も盛んで、「越王（こしわ）柿」の産地として昨今は有名になってきています。この越王柿やその元となっている佐渡のおけさ柿は渋柿で、脱渋作業を行ってから出荷となります。集荷所でどのように脱渋するのかはわかりませんが、家庭でする場合などは袋に入れた柿に焼酎を振りかけ、それにより脱渋を行っています。

さらに、ちょっと車を走らせれば、ラムサール条約に指定された佐潟を見ることができます。冬の明け方や夕暮れ時は、水面で休みをとる水鳥たちが静かに夜が明けるのを待っています。

また、新潟市内からもう少し足をのばせば、加茂市の加茂山公園がお薦めです。加茂駅から徒歩で5分。ホントに散歩感覚で楽しむことができます。

公園といっても敷地は広く、子供が遊べるような遊具もありますから、子ども連れで来るのもよいかもかもしれません。

園内には遊歩道も整備され、森林浴を楽しむこともできます。また、秋に限らず、春には格好のお花見スポットになるほか、県内有数の雪椿の生育地にもなっていますので、冬にも楽しむことができます。



越王（こしわ）柿

(株)佐藤企業 出口勝也



## 誠実は営業の基礎 ——人生の損益計算書

日特建設(株)常務取締役営業本部(ダム担当) 藤本 秀男  
岩盤削孔技術協会理事



藤本 秀男(ふじもと ひでお)  
昭和18年2月6日京都府生まれ。  
昭和41年東北大卒、日特入社。  
平成9年常務取締役基礎本部長。  
平成14年常務取締役ダム担当。

生地福知山市は、台風のたび水害に襲われた。2階床を越え冠水したときは、屋根に登って真っ暗闇の中で“助けてくれ”という叫びを聞いていた。

由良川上流にダムができて下流に水門ができ、水害は昔話となった。

中学時代はバスケットボール、高校時代は陸上と（今では、スポーツ少年だったことを家族も信用してくれないが）身体は頑丈だった。

東北大学理学部地質学科では、卒論エリア（三戸東部、5万分の1地図1枚分）を、足掛け2年間“藪漕ぎ”してまわった。このときの悲しさと苦しさを思い出すと、社会に出てからの困難は、何でも我慢できたし、ましだった。

昭和41年に日特建設(株)に入社して、四十四田ダムを皮切りに、長期間のものでは奈川渡ダム、草木ダム、川治ダム、下湯ダムと、約11現場、20年間の飯場暮らしをした。その後もダムにかかわる仕事（ダム基礎、アンカー、地すべり、杭、深礎、トンネル等）に従事して、36年間孔掘りにかかわってきた。

とにかく日特は、大きくても小さくても、縦でも横でも斜めでも、「孔を掘る」のが好きな会社なのだ！ “同じ釜の飯を食う”ということはあるがたいことで、現場でお世話になった方々と、今日に至るまでお付き合いをしていただき、お仕

事もいただいている。

60歳を目前にして、過ぎ去った日々のことを思い出すようになり、近頃感じることは…、「人生の損益計算書の収支は、必ず±0になってしまうのではないか」ということである。苦しいこと、辛いことがあったとき、そのままに受け止めて前に進んでいけば、やがてそれが逆に自分を高めることになったりする。

得意になっておごり高ぶっていると穴に落ちたりするし、泡銭が入って喜んでいたら、詐欺にあって失うとか、寄付したお金が廻り廻って、自分たちを助けてくれるとか、人生いろいろなことが、すべて±0となっていくような気がする。したがって、自分のことを悲しんだり、他人のことをうらやんだりする必要もないと思う。

いただいたお仕事をやっていくときも、誠実にきちんと良い仕事をやれば、必ずその報いがあると思う。誠実な仕事は次の仕事を呼んでくれるし、一時的な目先の利益で雑な仕事をすれば、先々その報いを受けると思う。

誠実な仕事をし、自信をもってお渡しできる成果品をつくったときに、本当の充実感と喜びを覚えるものだ。

最近の風潮として、とくにダムを悪者にして迎合しようとしている人たちがいるが、ダムのありがたさを知っている私にしてみれば、（ダムに限らないが）防災を忘れた人たちはきっとその報いを、どこかで受けるのではないかと考えている。憤慨して、こんな話を家族にしていたら“お父さんもボケがはじまったわね！”と馬鹿にされてしまったが…。

今後とも気負わずに、必死で仕事を続けられたら幸せだと考える。

老職人が、何やらぶつぶつぶやく、今日この頃である。

(日特建設(株) 藤本秀男)